

平成 26 年 6 月 27 日

# 南の風 68

南部ミニバスケットボール連盟  
会 長 藤原 敬一

サッカーワールドカップの、日本予選リーグ敗退が決まってしまいました。

非常に残念でした。日本中が決勝トーナメント出場を願っていたのに大変悔しかったです。敗因について、各メディアのコメントはいろいろありました。その中で、なるほどそういう見方があるのかというものがありました。バスケットボールの指導にもつながると感じました。簡単に紹介します。ある新聞のコラムからです。

ずばり言うと、ザックジャパンのチーム力は2年前がピークだったというのです。本田選手、香川選手、長谷部選手、長友選手たちの絶頂期も2年前であったというのです。ザッケローニ監督は、すばやいパスをつなぎ、攻撃的なサッカーを目指しました。4年間の集大成が今回のワールドカップのはずでした。しかし、結果は予選敗退でした。コラムでは、「ピークが早く来過ぎたのでは」、とありました。早く出来上がりすぎたのだというのです。2年前にピークがきてからのザックジャパンのチーム力は、ほぼ横ばい状態となり、目指すサッカーの方向性があいまいになってしまったのではと語っています。

もちろん、これは一つの意見です。これが原因とは言い切れないとは思いますが。ただ、私はバスケットボールの指導についても、このようなことはあると思うのです。

自分の経験を書きます。選手のお陰で、私は通算9回全国大会（常盤台で6回、永田台で3回）に出場させていただきました。指導者に成りたての頃は、いつも全部の大会で勝ってやろうと思っていました。選手のことを考えるより、教えれば教えただけうまくなると信じていたものです。

しかし、何度か全国大会に出場させていただくうちに、『選手は際限なく伸びてはいかない。』と気づかされました。そして、神奈川県大会を勝ち抜くには、どのゲームにピークを持っていくのか、全国大会までにどうチーム力をアップするかを考えるようになりました。

選手が際限なく伸びていかないのは、ミニバスでは次の点だと考えます。

①筋力や持久力が十分育っていない。

1対1で毎日のように繰り返して練習しても、右肩上がりで上達はしません。選手には限界があります。筋力が伴わないのに繰り返してやることは、メンタル面が疲弊するだけです。また、やり過ぎは怪我に繋がります。（子どもたちの身体の成長を待たなければなりません。）

②メンタル面で長期に亘る集中力の持続は難しい。目指す大会を絞ることが重要。

ミニバスケットボールの活動は年間通したものです。大会スケジュールが過密です。選手の能力が突出していたり、10人が長身で動けたりするような場合は、全大会を勝ちにいくこともありなのかもしれませんが、何とか県の上位を狙えるような年の場合、目指す大会を絞るべきです。

目標を関東大会にする、全国大会にするといったものです。

①を踏まえ、オフェンスでは、合わせのプレイを大切する。ディフェンスでは、5人が協力して守るといったことが重要になります。また、②では目指す大会に照準を合わせ、選手のピークをその大会に持っていくことが指導者の役目ではないでしょうか。次号は、お約束のインター都大会予選です。